

Gallery of The Fine Art Laboratory

拝啓 時下ますますご清祥の事とお慶びを申し上げます。

この度、10月1日（月）から11月2日（金）まで、武蔵野美術大学「Gallery of The Fine Art Laboratory」にて、永井天陽「名無しのかたち」展を開催いたします。是非ご高覧いただきたく、ご案内申し上げます。

## 永井天陽「名無しのかたち」

そっと、自分がどうやって息をしているのかを考えることがありました。  
するとだんだん息を吸うことも吐くことも、できなくなっていました。  
意識の照射をずらせば元に戻せるほどの些細なことなのですが、  
まるで背筋を吸い取られるかのような深い混乱がありました。  
物事の裏側に不安定に存在する部分を瞬間的にでも表側にするように、ぐるりとかき回すこと。  
そうしていると、世界の裂け目がちらりと見えること。  
わたしは強引にでも、新しい地軸を刺してみたいです。

永井天陽

### 【作家略歴】

永井天陽 / Solaya Nagai

1991年 埼玉県飯能市生まれ

2014年 武蔵野美術大学造形学部彫刻学科卒業

2016年 武蔵野美術大学大学院造形研究科美術専攻彫刻コース修了

### 【主な展覧会歴】

#### 〈個展〉

2014年 八角堂プロジェクト PHASE2014 Part3「北に歩いて南へ向かう」  
青森県立美術館（青森）

2015年 「いつかのニュース」 gallery blanka（名古屋）

2017年 「おおきなささやき」 HARMAS GALLERY（東京）

#### 〈グループ展〉

2014年 大学院彫刻コース選抜展「線を積む | Piling Lines」武蔵野美術大学 FAL（東京）

2015年 藤本美穂・永井天陽二人展「BURR」Grill Gallery（東京）

「彫刻と対話法」府中市美術館 市民ギャラリー（東京）

「ISETAN ART & CREATION FESTA 2015」新宿伊勢丹本館（東京）

「3/2,4」Bambinart Gallery（東京）

2016年 「根と路 - roots' n routes - 」遊美工房（倉敷）

SUPER OPEN STUDIO「SOMETHINKS」アートラボはしもと（東京）

2017年 日本文化藝術財団「杜の中の文化祭 2017 CAC」

京都造形芸術大学・東北芸術工科大学外苑キャンパス（東京）

2018年 「ART NAGOYA 2018」ホテルナゴヤキャッスル（名古屋）

熊倉涼子・永井天陽二人展「DI-VISION/0」TAV GALLERY（東京）

#### 〈受賞歴〉

2014 清水多嘉示賞 受賞

2015 日本文化藝術財団 平成26年度日本文化藝術奨学金 受給

2018 日本文化藝術財団 25周年記念助成 受給

### 【開催概要】

会期：2018年10月1日（月）～11月2日（金）11：00～17：00 日・祝祭日休廊

会場：Gallery of The Fine Art Laboratory

〒187-8505 東京都小平市小川町1-736 武蔵野美術大学2号館1階

主催：Gallery of The Fine Art Laboratory（彫刻学科研究室企画 問い合わせ先：042-342-6055）

助成：公益財団法人 日本文化藝術財団



## 【展覧会に寄せて】

## 「幼年期の終わり」

いわゆる幼年期とは「怖いもの」を克服する時代と言えましょう。その方法とは、知らないものに一つ一つ名前をつけてゆくこと。幼年期においては、知らないものは即ち恐怖の対象となりうるからです。これは誰もが無意識に行って来たことかもしれませんが、それはまた名付けられていないものとの付き合い方でもあったはず。言い換えれば「恐怖」との付き合い方と言ってもいいでしょう。しかしいうまでもなく幼年期が終わっても恐怖や不安は消えません。このためにこれまでに不寛容に名付けて来たものを疑い、世界をもう一度名前の無い存在として出会いたいという欲求が出て来ても不思議では無いでしょう。永井天陽は名付けられたものを疑う表現である「名前と物の関係」を宙づりにするための多彩さに満ちています。「名前と物の関係」については、シュールレアリズムのディペイズマンを待つまでもなく同時代の美術においては特別珍しいことではないかもしれません。またそれは比較的安易に表現に結びつくような際どさは拭えません。しかし永井の表現の展開は、それらの方法以前の問題として横たわっている日常の中に感じる漠然とした不安やある種の恐怖に対して色々な方法でかたちを与えることが感じられます。例えばイメージと言語との結びつきで強制的に形を変形させられた剥製のようである種の猟奇的な手業。あるいは眼差しによっては拘束具を思わせるベビー用品。それらは永井の手業を通して恐怖とユーモアを往復する場を作り出しています。

また永井の作品のもう一つの側面としてあげられるのは、100円ショップで流通するような量産的な製品開発を思わせる表現の強引さでしょう。永井の制作プロセスは、オリジナリティのある形体を産出するためのいわゆる彫刻的な制作方法というよりは、安価に大量生産できるような単純な型を制作することです。それは手で作るプロセスを大切にしながらも趣味的な感性に流されるものではありません。「名前と物の関係」に焦点を当てる表現として歴史的にもしばしば用いられて来たレディメイドのように直接に物を提示するのではなく、それを生み出している生産過程や流通プロセスから生まれる表現に着目したところが永井流と言えましょう。量産品が機能や目的に応じて素材の吟味が行われるように、これらの作品も色彩や素材が決定づけられてゆきます。それでは永井天陽の多彩な世界をお楽しみください。

(武蔵野美術大学彫刻学科教授 伊藤 誠)



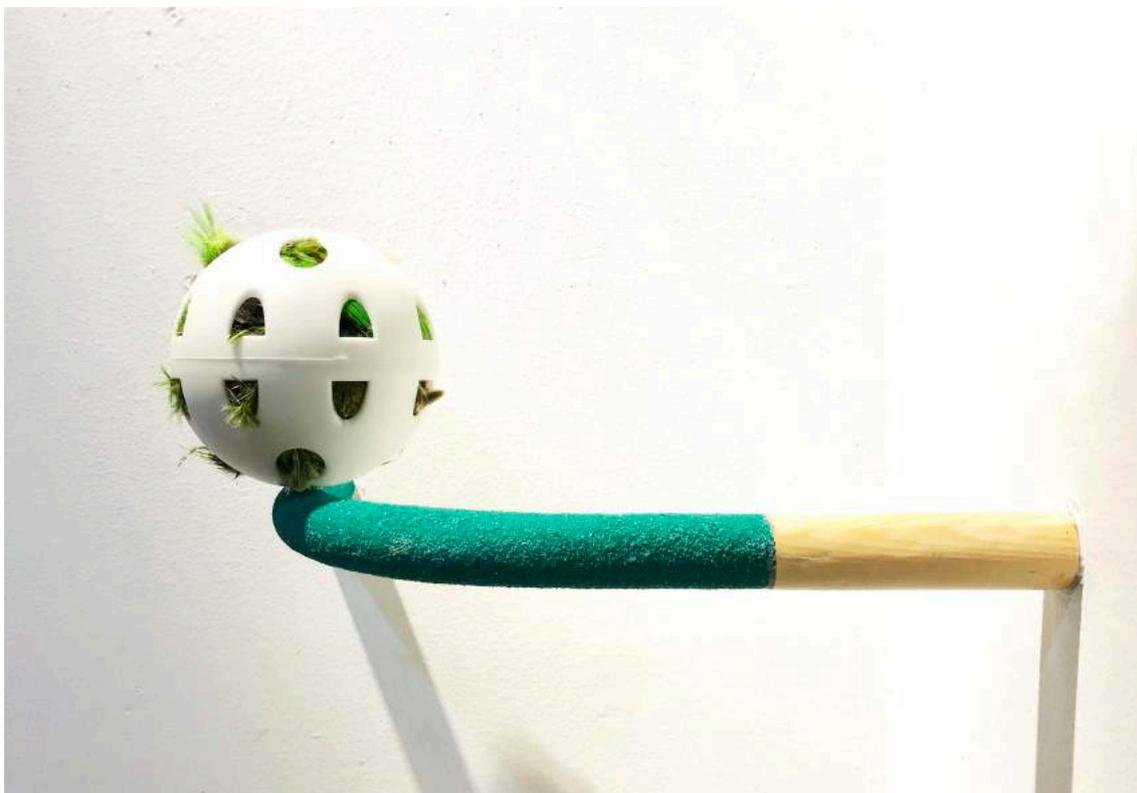
loud whisper  
2017年  
アクリル材、スクリーンプリント  
H:45 W:35 D:20 cm  
photo:Hayato Wakabayashi



metaraction #17-1  
2017年  
バービー、アクリル材  
H:34 W:8,5 D:7 cm  
photo:Hayato Wakabayashi



窓から窓へ (裏庭)  
2017年  
アクリル材、スクリーンプリント  
サイズ可変  
photo:Hayato Wakabayashi



urnto 18-1  
2018年  
鳥の剥製、おもちゃのボール、止まり木  
H:12 W:30 D:18 cm